

明治の洋楽草創期における幼児唱歌集に関する研究

A Study of Children's Songbooks during the Introductory Period of Western Music in the Meiji Era

大山 伸子
Nobuko Oyama

要 約

日本の洋楽草創期における幼児唱歌集は、明治10（1877）年から明治15（1882）年にかけて、日本初の「保育並遊戯唱歌（保育唱歌）」が作成され、明治20（1887）年には日本初の官製版『幼稚園唱歌集』、明治34（1901）年には、瀧廉太郎等による初の伴奏付き『幼稚園唱歌』が刊行されている。

「保育並遊戯唱歌（保育唱歌）」は、東京女子高等師範学校附属幼稚園（現・お茶の水女子大学附属幼稚園）が開園された翌年、園児たちへの音楽教育の重要性を唱え宮内省式部寮雅楽課に依頼して作成されたものだが、歌詞は万葉集や古今集等の日本古歌から選定されたものが多く、曲は雅楽課伶人（演奏者）たちによる撰譜（作曲）で、幼稚園児たちには歌い難い教材だった。

『幼稚園唱歌集』は、文部省音楽取調掛（現・東京藝術大学）が編纂した日本初の官製発行だったが、西洋の既成曲に文語体の歌詞をはめたものが多く、子どもたちには馴染みにくい曲が多かった。

『幼稚園唱歌』は共益商社書店によって編集・発行されたとあるが、実際は瀧廉太郎等によって編纂されている。瀧廉太郎は、子どもが歌いやすい話し言葉や口語体の歌詞に曲を付け、歌詞も曲も既成のものではなく新しく創作した20曲を収めた。

『幼稚園唱歌』発行以前の幼児唱歌集は、単旋律のみであったが、瀧廉太郎等によって初めてピアノ（オルガン）伴奏が付けられた。瀧廉太郎の「お正月」「水遊び」などは、四季を彩る音色で子どもたちに親しまれ今日まで歌い継がれている。瀧廉太郎は日本の幼児音楽に先鞭をつけた音楽教育者としても位置づけられるだろう。

本論文は、明治の洋楽草創期における幼児唱歌集のターニングポイントとして、「保育並遊戯唱歌（保育唱歌）」、『幼稚園唱歌集』、『幼稚園唱歌』について、それぞれの特徴を論述し日本の音楽教育に果たした役割にも言及する。

I. 明治の洋楽草創期の幼児唱歌集

明治期に発行された幼児関連の唱歌教材集は、出版物のリストを調査すると「遊戯唱歌」「育兒唱歌」等を含め約43編存在するが^(註1)、本論文は、日本で初めて発行された幼児の唱歌集「保育並遊戯唱歌（保育唱歌）」^(註2)、日本で初めて官製版として発行された『幼稚園唱歌集』^(註3)、そして、日本で初めてピアノ（オルガン）伴奏が付けられた『幼稚園唱歌』^(註4)を取り上げ、幼児唱歌集の変遷を辿る。

1. 「保育並遊戯唱歌（保育唱歌）」

日本の洋楽草創期の学校教育は、明治5（1872）年に学制が敷かれたが、音楽教科は「唱歌当分乏を欠く」、「奏楽当分欠く」とされた。それは、西洋音楽教育導入の実際として、音楽の指導者や方法論、教材にまったく手立てがなかったからである。

東京女子高等師範学校では、附属幼稚園の開園に伴い（明治9＝1876年）、フレーベル主義メソッドを取り入れていた影響から、幼児の音楽教育を積極的に導入しようとする動きがあり、明治10（1877）年、式部寮（宮内省雅楽課）に唱歌の撰譜（作曲）を依頼した。

式部寮では、「保育並遊戯唱歌（以下保育唱歌とする）」を明治10＝1877年11月から明治15＝1882年にかけて作成し、それが幼児唱歌集として日本で最初のものであった。

歌詞は万葉集、古今集や明倫集などから選ばれ、楽譜は式部寮伶人が撰譜した雅楽の墨譜で表されており、楽器は和琴（わごん）、笏拍子（しゃくびょうし）などである。当時は「ピアノやオルガンのない時代の事として和琴を用いて声律の規範としたものであった」^(註5)。保母養成のために東京女子高等師範学校生が、宮内省式部寮の伶人たちによって指導を受けており、「保育唱歌」は必ずしも附属幼稚園児のためだけの教材ではなかったといえる^(註6)。東京女子高等師範学校附属幼稚園は式部寮に曲を上申し、幼稚園現場で実践した。

「保育唱歌」100曲を上申年月日順に整理し表記化してみる。

【表1】「保育並遊戯唱歌（保育唱歌）」^(註7) 空欄は不詳 作成：筆者

上申年月日	番号	曲名	歌詞作者	撰譜者（作曲）	唱歌種類
明治10/11/13	1	風車	豊田英雄	東儀季熙	遊戯唱歌
〃	2	冬燕居（ふゆのまどい）		東儀季熙	唱歌
明治10/12	3	百鳥		林廣守	唱歌
〃	4	秋ノ日影（露箱）		芝葛鎮	唱歌
〃	5	寒夜（夜寒）		上真行	唱歌
〃	6	家鳩	豊田英雄訳	東儀季芳	遊戯唱歌
〃	7	遊魚（うろくづ）		山井景順	遊戯唱歌
〃	8	兎	ドイツ民謡（原曲）	多忠廉	遊戯唱歌
明治11/2/22	9	ハハソバ		上真節	唱歌
〃	10	河水		東儀季芳	唱歌
〃	11	我行末		林廣継	唱歌
〃	12	花橘		山井基萬	唱歌
〃	13	遊行（手車）		辻高節	遊戯唱歌
〃	14	チチコソ		東儀頼玄	唱歌
明治11/3	15	学道（まなびのみち）	昭憲皇太后	東儀季熙	唱歌
明治11/4/9	16	菊ノカザシ		林廣守	唱歌
〃	17	白ガネ（白金）	山上憶良（万葉集）	芝葛鎮	唱歌
〃	18	よよノ親	本居宣長	林廣季	唱歌
〃	19	ヤスキタメシ		山井景順	唱歌
〃	20	墨縄		多久随	唱歌
明治11/6/17	21	民草	豊田英雄	東儀季芳	唱歌
明治11/7/17	22	天鶴群（たづむら）		山井基萬	唱歌
〃	23	ヨロヅノコト		多忠廉	唱歌
〃	24	ソムカヌミチ		多忠廉	唱歌
〃	25	濱ノ真砂		奥好義	唱歌

上申年月日	番号	曲名	歌詞作者	撰譜者(作曲)	唱歌種類
明治11/8	26	春日山	入道前太政大臣(明倫集)	上真節	唱歌
〃	27	神ノ恵	本居宣長(玉銚百首)	林廣継	唱歌
〃	28	オモフドチ	平兼盛(拾遺集)	林廣継	唱歌
〃	29	元ハ早苗	少尉源定従(三草集)	林廣季	唱歌
〃	30	鹿嶋神(かしまのかみ)	大舎人千文(万葉集)	東儀彭質	唱歌
〃	31	隅田川	村田晴海(琴後集)	豊喜秋	唱歌
〃	32	園ノ遊		奥行業	遊戯唱歌
明治11/10/7	33	子(ね)ノ日遊	村田晴海(琴後集)	芝葛鎮	唱歌
〃	34	兄弟ノ友愛	豊田英雄訳	豊喜秋	唱歌
〃	35	苗代水	橘為仲(明倫集)	多久随	唱歌
〃	36	野山ノ遊	豊田英雄訳	奥好壽	遊戯唱歌
明治11/11/27	37	睦奥(みちのく)山	大伴家持(万葉集)	林廣守	唱歌
〃	38	神之道(光)	為盛朝臣(明倫集)	上真行	唱歌
〃	39	梓弓(あずさのゆみ)	平春庭(明倫集)	山井景順	唱歌
〃	40	カヒアル千代	橘技直(明倫集)	辻則承	唱歌
〃	41	筥	村田春門	近藤濱	唱歌
明治12/1/16	42	富士山	山辺赤人(万葉集)	東儀季芳	唱歌
〃	43	サザレイシ	古今集(読人不知)	東儀頼玄	唱歌
〃	44	春ノ山辺	素性法師(古今集)	東儀俊慰	唱歌
〃	45	ウナヒノ導キ	豊田英雄訳	芝祐夏	唱歌
〃	46	露ノ光		奥好壽	唱歌
〃	47	教ノ道	豊田英雄訳	豊時鄰	唱歌
明治12/2/5	48	盲想(めしひのあそび)	豊田英雄訳	奥行業	遊戯唱歌
〃	49	窮鼠(こねずみ)	豊田英雄訳	東儀季長	遊戯唱歌
明治12/5/10	50	人ノ道(誠)		東儀彭質	唱歌
〃	51	学校往来(まなびのゆきかひ)	豊田英雄訳	辻高節	唱歌
〃	52	王昭君	村田晴海	奥好義	唱歌
〃	53	桜ヲヨメル	橘千蔭	多久随	唱歌
〃	54	造化ノ妙(かみのたゑ)	近藤濱	近藤濱撰譜 (芝葛鎮校正)	唱歌
〃	55	盲想遊戯	豊田英雄訳	近藤濱	唱歌
明治12/9/13	56	夏山	慈円(金葉集)	林廣守	唱歌
〃	57	山時鳥(やまほととぎす)	近藤濱	東儀季芳	唱歌
〃	58	瀧ノ白糸	盛方(千載集)	林廣継	唱歌
〃	59	養蚕(こがい)	平兼盛(拾遺集)	林廣季	唱歌
明治12/11	60	明石ノ浦	柿本人麿	多久随	唱歌
〃	61	梢ノ藤	橘千蔭(うけらが花)	東儀俊慰	唱歌
〃	62	木毎ノ花	紀友則(古今集)	東儀頼玄	唱歌
〃	63	堤ノ雲	村田春野		唱歌
〃	64	二見ノ浦	藤原兼輔	東儀頼玄	唱歌

上申年月日	番号	曲名	歌詞作者	撰譜者(作曲)	唱歌種類
明治12/11	65	唐琴ノ浦	素性法師(古今集)		唱歌
〃	66	去冬(こぞ)ノ雪	前関白左大臣(統後撰集)	林廣季	唱歌
〃	67	蟋蟀(コオロギ)	万葉集(読人不知)	山井基萬	唱歌
〃	68	水底ノ月	紀貫之(古今集)	奥好壽	唱歌
〃	69	山下水	紀貫之(拾遺集)	豊喜秋	唱歌
〃	70	山家	近藤濱訳	奥好壽	遊戯唱歌
明治12/12/9	71	春	近藤濱訳	林廣守	遊戯唱歌
〃	72	夏	近藤濱訳	林廣守	遊戯唱歌
〃	73	秋	近藤濱訳	林廣守	遊戯唱歌
〃	74	冬	近藤濱訳	林廣守	遊戯唱歌
明治13/5/20	75	竹ノ根	橘千蔭	山井基萬	唱歌
〃	76	白雲	村田晴海	東儀俊慰	唱歌
〃	77	行巡(ゆきめぐり)	小野右大臣(古今集)	東儀彰質	唱歌
〃	78	雪降りて	古今集より	上真行	唱歌
〃	79	花見ノ駒	柿本人磨(万葉集)	豊喜秋	遊戯唱歌
〃	80	宇治川	柿本人磨(万葉集)	奥好壽	唱歌
〃	81	イロハ		近藤濱撰譜 東儀秀芳(校正)	唱歌
明治13/6	82	鏡山		林廣守	唱歌
〃	83	フリヌルフミ(古ぬる文)		芝葛鎮	唱歌
〃	84	款冬(やまぶき)		東儀秀熙	唱歌
上申月日不詳	85	大和撫子	税所敦子	林廣継	唱歌
〃	86	若紫	平尾歌子	多忠廉	唱歌
〃	87	君ガ代	古今集(読人不知)	林廣守	唱歌
〃	88	ウミユカバ	大伴家持(万葉集)	東儀秀芳	唱歌
〃	89	六ノ球	豊田英雄	辻高節	唱歌
〃	90	赤色	豊田英雄	奥好義	唱歌
〃	91	黄色	豊田英雄	豊喜秋	唱歌
〃	92	青色	豊田英雄	多久随	唱歌
〃	93	柑色	豊田英雄	奥好壽	唱歌
〃	94	緑色	豊田英雄	多忠廉	唱歌
〃	95	紫色	豊田英雄	豊時鄰	唱歌
〃	96	元色	豊田英雄	辻則承	唱歌
〃	97	間色	豊田英雄	東儀秀長	唱歌
〃	98	倭心(大和心)	水戸斎昭	東儀季芳	唱歌
〃	99	君ガ恵		芝葛鎮	唱歌
〃	100	科炉ノ風	水戸斎昭	東儀季芳	唱歌

唱歌の種類は唱歌と遊戯唱歌があり、遊戯唱歌には「…歩」と記載されており、歌と身体表現の教材と思われる。例えば、「風車」2歩、「家鳩」56歩、「遊魚」54歩、「兎」48歩、「遊行」74歩、「園ノ遊」52歩、「野山ノ遊」48歩、「盲想」56歩、「窮鼠」56歩、のように記入されており、歌いながら拍をステップ表現する身体表現を伴うものであったようだ。実際、「遊戯ノ歌ハ笏拍子ヲ拍子節ヲ左右ノ歩デ踏ミテ謳フ」と記載されている。^(註8)

また、「保育唱歌」を再現した音源を聴いてみると^(註9)、旋律はゆったりとしたテンポで歌われているが、「家鳩」、「遊魚」、「兎」、「窮鼠」など遊戯唱歌は軽快なテンポである。曲の高音は二点E音まであり、時折2度音程が繰り返され(【楽譜1】5、11、25小節目)、斉唱で歌われている。伴奏楽器として和琴(わごん)、打楽器に笏拍子(しゃくびょうし)、曲によっては笙や箏、琵琶が加わり、雅楽調の宮廷音楽そのものである。「教ノ道」は以下の旋律である。【楽譜1】

【楽譜1】「保育唱歌」より「教ノ道」

採譜：筆者^(註10)

10 ヒトスジニチチトハハトヲタツミ

20 テツカヘマツルゾアメツ

チノスグナルミチノオシヘナリケル

現代の子ども音楽のようにスキップや8分音符を多用する曲とは大分異なっており、日本の幼児唱歌の“夜明け”がこのような宮廷音楽調の楽曲であったことに、140年の日本音楽教育の歴史を偲び、隔世の感に打たれる。

ところで、「保育唱歌」の中には、「君ガ代」が収録されている【表1-87】。「君ガ代」が日本で初めて楽譜(墨譜)として表されたのは「保育唱歌」であり、今日まで歌い継がれている唯一の曲である。

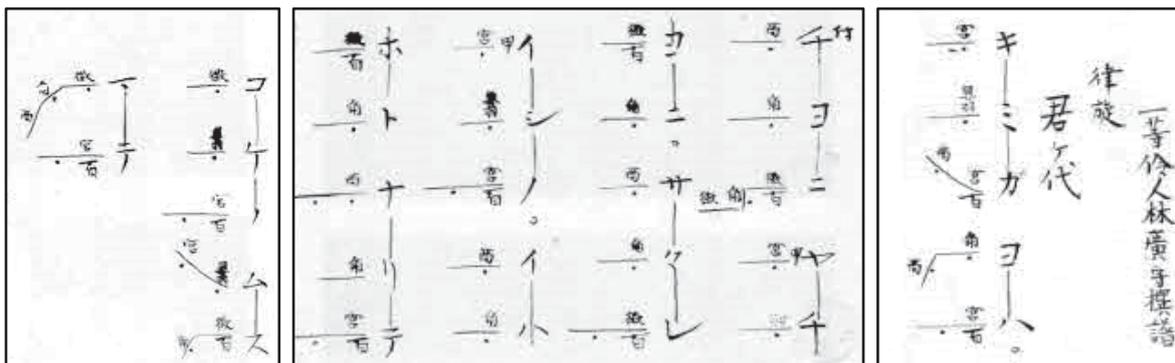
そもそも、「君ガ代」は国歌としての成り立ちではなく(現在は平成11=1999年国歌制定)幼児曲として「保育唱歌」に墨譜で記録され、幼稚園唱歌として指導されていたことがわかるが、本論では墨譜を写譜したものを提示する【楽譜2】。「保育唱歌」の約100曲中(異名同曲あり)、今日では「君ガ代」以外、全く歌われていない。

「保育唱歌」が作成された明治10(1877)年から15(1882)年頃は、まだ西洋楽譜は普及しておらず、雅楽の「墨譜」によって表されている。その後、昭和33(1958)年、芝祐泰(しば・すけひろ)氏によって墨譜から五線譜化された。【楽譜3】

「君ガ代」の初演について、『復刻 明治の唱歌Ⅲ(p.68)』^(註11)には、「芝祐泰によると、君ガ代の公式の初演は明治12(1879)年10月29日から31日の3日間行われた雅楽稽古所の楽舞及び欧州楽の公演会で、雅楽課の欧州楽伝習取締拍子人(指揮者)小篠秀一の指揮により毎日演奏された。この時の演奏は全吹奏楽器の斉奏であったという」と克明に記入されているが、『音楽基礎研究文献集第15巻』(江崎公子編/大空社、1991、p.63)には、「楽員貳拾八名」とも記

【楽譜2】「君ガ代」(芝祐夏筆保育唱歌譜)^(註12)

沖縄キリスト教学院図書館 蔵



【楽譜3】「君ガ代」の現代的五線譜^(註13)

沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館 蔵



されている。

「保育唱歌」は、明治16(1883)年に活字印刷(出版)を試みたが実現せず、手書きメモとして残った。

「君ガ代」の撰譜者は、「林廣守(はやし・ひろもり)」となっているが、実際は宮内省雅楽課四等伶人「奥好義(おく・よしいさ)」である。当時、宮内省雅楽課伶人の代表だった林廣守の名前で登録されたことから撰譜者と記され、現在に至っている。上記の楽譜【2、3】にも、「一等伶人林廣守撰譜」と記されている。

以上のように、日本初の幼児唱歌集である「保育唱歌」は、東京女子高等師範学校(現・お茶の水女子大学)附属幼稚園の依頼によって宮内省雅楽課で作成され、附属幼稚園で実践された。約100曲の教材は、「君ガ代」以外は140年経て現在、歌い継がれていないが、「保育唱歌」は日本幼児音楽教育の“幕開け”であり、音楽教育上、重要な歴史的役割を果たしている。また、現在の幼児音楽の出発点として確認することができる貴重な事績といえよう。

2. 『幼稚園唱歌集』

『幼稚園唱歌集』は明治20(1887)年、文部省音楽取調掛(現・東京藝術大学)で編纂され29曲収められて発行された。官製版としては、明治15(1882)年から明治17(1884)年にかけて初編から第3編まで小学校音楽教材として刊行された『小学唱歌集』^(註14)に続く幼稚園児に向けた初の教材曲集である。

『幼稚園唱歌集』の特徴について緒言^(註15)を通して見てみよう。

緒言（原文のまま）

- 一 本編ハ、兒童ノ、始メテ幼稚園ニ入り、他人ト交遊スルコトヲ習フニ當リテ、嬉戯唱和ノ際、自ラ幼徳ヲ涵養シ、幼智ヲ開發センガ為ニ、用フベキ歌曲ヲ纂輯シタルモノナリ。
- 一 唱歌ハ、自然幼稚ノ性情ヲ養ヒ、其發聲ノ節度ニ慣レシムルヲ要スルモノナレバ、殊ニ幼稚園ニ欠ク可ラズ。諸種ノ園戯ノ如キモ、亦音樂ノカヲ假ルニ非レバ、十分ノ効ヲ奏スルコト能ハザルモノナリ。
- 一 幼稚園ノ唱歌ハ、殊ニ拍子ト調子トニ注意セザル可ラズ。拍子ノ、緩徐ニ失スルトキハ、活潑爽快ノ精神ヲ損シ、調子ノ高低、其度ヲ失スルトキハ、音聲ノ發達ヲ害スルノミナラズ、幼稚ノ性情ニ厭惡ヲ醸シ、其開暢ヲ防グル恐レアリ。故ニ本編ノ歌曲ハ、其撰定ニアタリ、特ニ此等ノ要旨ニ注意セリ。
- 一 幼稚園ニハ、箏、胡弓、若クハ洋琴、風琴、ノ如キ樂器ヲ備ヘテ、幼稚ノ唱歌ニ協奏スルヲ要ス。是レ樂器ニヨリテ、唱和ノ勢カヲ増シ、深ク幼心ヲ感動セシムルノカアルヲ以テナリ。

明治十六年七月

緒言には、児童の発達過程を捉えて的確な指導方法を示しており、『幼稚園唱歌集』は、幼稚園向けの唱歌集であること、音楽教育は幼徳の涵養や幼知の開発が目的であること、音楽は幼稚園教育に欠かせないこと、幼稚の性情を豊かにすること、としており、教材選曲や指導の楽器についても言及している。

以下に、『幼稚園唱歌集』の29曲にあたって表記化してみたい。

【表2】『幼稚園唱歌集』

作成：筆者

ルビは原本通り。原本には作者名は記載されていないため資料^(註16)を参考に記載した。曲構成の解釈は筆者。

	曲名	作詞／作曲	曲構成
1	こころ たけ 心は猛く	里見義／ Lowell Mason	へ長調・2/4拍子・16小節・7音音階
2	てふてふ 蝶々	1番：野村秋足、2番：稲垣千穎 ／ドイツ民謡	ト長調・4/8拍子・16小節・7音音階
3	すす すすめ 進めよ	加藤巖夫／不明 現在では「雀のお宿」	へ長調・2/4拍子・24小節・7音音階
4	かすみ くも 霞か雲か	加藤巖夫／ドイツ民謡	ニ長調・4/4拍子・12小節・7音音階
5	まな 學べよ	不詳	変ホ長調・4/8拍子・8小節・7音音階
6	とり にはつ鳥	不詳	ハ長調・6/8拍子（アウフタクト）・8小節・7音音階
7	とも 友どち	不詳	ト長調・4/4拍子・20小節・ヨナ抜き音階
8	こどもこども 子供よ	伊沢修二／伊沢修二	ト長調・2/4拍子・12小節・7音音階
9	わかこま 若駒	Karl Hahn／ Karl Gottlieb Hering	ト長調・2/4拍子・12小節・7音音階
10	おおはらめ 大原女	ドイツ民謡	ト長調・6/8拍子（アウフタクト）・8小節・7音音階
11	かはせ ちどり 川瀬の千鳥	不詳／ Luther W. Mason	ニ短調・6/8拍子・12小節・7音音階 （8小節6拍目からへ長調に転調）
12	たか 竹むら	不詳	ト長調・6/8拍子（アウフタクト）・8小節・7音音階

	曲名	作詞／作曲	曲構成
13	あめつゆ 雨露	Friederike Brun ／Johann Abraham peter Schulz	変ホ長調・6/8拍子・10小節・7音音階
14	ふゆ そら 冬の空	不詳／ Guillaume Louis Bocquillon	ヘ長調・C拍子（アウフタクト）・16小節・7音音階
15	はな はる 花さく春	伊沢修二／伊沢修二	ト長調・4/4拍子・24小節・ヨナ抜き音階 （6小節目C音経過音的）
16	はなざくら やよ花桜	Hoffmann von fallersleben ／Ernst Richter	ヘ長調・C拍子・8小節・7音音階
17	つばくらめ 燕	原曲：ドイツ曲	ト長調・C拍子・11小節・7音音階
18	ますぐ 真直に立てよ	不詳／Adolf Douai	ヘ長調・2/4拍子・56小節・7音音階
19	わがおほきみ 我大君	不詳	ヘ長調・4/4拍子・22小節・7音音階
20	もん ここのなる門	1・2番：加部巖夫、3・4番： 豊田英雄／伊沢修二	ト長調・4/4拍子・8小節・7音音階
21	みづ うづまく水	原曲：フランス古歌 現在では「きらきら星」	ト長調・2/4拍子・24小節・7音音階
22	たまき 環	不詳	ヘ長調・2/4拍子・20小節・7音音階
23	まり 毬	不詳	イ長調・2/4拍子・18小節・7音音階
24	あにおとともと 兄弟妹	不詳	ヘ長調・C拍子・20小節・7音音階
25	さうれん 操練	不明／ Adolf Douai	ヘ長調・2/4拍子・10小節・7音音階
26	かざぐるま 風車	豊田英雄／東儀季熙	雅楽・2/4拍子・16小節・律旋法
27	みつばち 蜜蜂	原曲：ボヘミア民謡 現在では「ぶんぶんぶん」	ト長調・2/4拍子・12小節・7音音階
28	いち は とり 一羽の鳥	不詳	イ長調・2/4拍子（アウフタクト）・14小節・7音音階
29	かぞ 数へうた	伊沢修二／伊沢修二	ホ短調・4/4拍子・ヨナ抜き短音階（律音階）

29曲中、現在も歌われている曲を中心に7曲について触れてみる。（番号は【表2】の曲番号）

2. 「蝶々（てふてふ）」

いわゆる「ちょうちょ」であるが【楽譜4】、現代の幼児唱歌集にも数多く掲載されており^(註17)、幼児教育現場では盛んに歌われている。『幼稚園唱歌集』の歌詞の1番は「テフーテフ テフーテフ ナノハニトマレ ナノハニアイタラ サクラニトマレ サクラノハナノサカユルミヨニ トマレヨアソベ アソベヨ トマレ」となっている。現在はアンダーライン箇所「サカユルミヨニ」の歌詞が、「はなからはなへ」となっており、他は同じように歌われている。原曲の拍子は4/8拍子だが【楽譜4参照】、現在は2/4拍子で歌われている。

3. 「進め」

今日では曲名「雀のお宿」で歌われているが、歌詞は全く異なっている。「進め」は、「ススメスメアントクススメ トマレトマレ イチニトマレ トマルモクモ マシノマニタツモカレモ マシノマニ サクサモナクトリモ オモシロキノサヅノヤ スススメスメ アシトクススメ」で軍歌調である。「雀のお宿」の歌詞は「すずめすず

め お宿はどこだ チチチチチ こちらでござる おじいさん おいでなさい ごちそう
いたしましよ おちやにおかし おみやげつづら さよならかえりましよう ごきげんよ
ろしゅう らいねんのはるも またまたまいりましよう」(作詞者不詳)と歌われ、歌いだし
は原詩の「ススメスメ」を振った「すずめすずめ」で始まり昔話のようなストーリー性
のある歌詞である。

4. 「霞か雲か」

第1番歌詞は「カスミカクモカ ハタユキカ トバカリニホフ ソノハナザカリ モモトリ
サヘモ ウタフナリ」の文語体である。戦後、昭和27(1947)年の音楽教科書に掲載され
たものは「かすみか雲か ほのぼのと 野山をそめる その花ざかり 桜よ桜 春の花」(詞：勝承夫
)と歌われ、『幼稚園唱歌集』の歌詞とは異なっている。

昭和49(1974)年の小学4年音楽指導書^(註18)には必修教材として記載されており、指導目
標として、(1)ハ長調の音階と階名・主音について理解させる。(2)曲趣を感じて美しく表現し
ようとする能力を育てる。(3)4/4の拍子記号について理解させる、等が取り上げられている。
現在の教科書には採用されていないが^(註19)、「春の訪れ」の曲名でも音楽愛好家に親しまれて
いる。

21. 「うづまく水」

現在では「きらきら星」で歌われ音楽教材曲として常連である。小学1年の教科書では鍵
盤ハーモニカや鉄琴等の旋律楽器の学習曲として導入され(教育芸術社平成29年発行pp.46
~47)、小学3年音楽教科書ではリコーダー鑑賞曲として扱われている(教育芸術社平成29年
発行p.21)。中学2・3年音楽教科書ではアルトリコーダーの学習曲になって導入されている(教
育芸術社「器楽」平成29年発行p.14)。広く一般的には、ピアノやヴァイオリンの練習曲と
しても多用されている。

26. 「風車(かざぐるま)」

日本初の幼児唱歌集「保育並遊戯唱歌(保育唱歌)」(明治10=1877年から明治15=1882年
作成)に収められている曲から採用されたものであるが、現在は歌われていない。

27. 「蜜蜂」

「ぶんぶんぶん」の曲名で現在も歌いつがれているが、歌詞が全く異なる。『幼稚園唱歌集』
の歌詞は「ハチヨ ミツバチヨ ハナニハ タハレズ ソガツユ モチキテ カモセ ナガ
ミツヲ」となっているが、現代の歌詞は「ぶんぶんぶん はちがとぶ おいけのまわりに
のぼらがさいたよ ぶんぶんぶん はちがとぶ」(日本語訳：村野四郎)と歌われているの
が一般的である^(註20)。小学1年生の教科書(教育芸術社平成29年発行pp.22~23)にも掲載さ
れタンブリンのリズム打ち練習の教材曲になっている。

29. 「数へうた」

子どもの唱歌集には見られなくなり、学校教科書にも掲載されていないが、現在は、「数
え歌 正月の歌」として歌われている。『幼稚園唱歌集』の「数へうた」1番歌詞は「ヒトツト
ヤ ヒトビトヒトヒモ ワスルナヨ ワスルナヨ ハグクミソダテシ オヤノオン オヤノ
オン」(作詞：伊沢修二)で10番まであり教訓的要素が強い。

現代の「数え歌 正月のうた」1番歌詞は、「ひとつとや ひとよあければにぎやかで にぎ
やかで おかざりたてたる まつかざり まつかざり」で3番まであり、正月の賑々しさを描
写して、原詩とは全く異なっている。^(註21)

【楽譜4】『幼稚園唱歌集』 原本より「蝶々」^(註22)

大阪市立大学附属図書館 蔵

1. ファーファ ファーファ ナノハニ トマレメ
 2. おきよ おきよ 蝶々らの すずめ

ナノハニの アイタラの サクラニ トマレメ
 あをひの ひあまの さくしこぬ ききに

サクラを ひなで さかすユルに きこま
 蝶々を ひなで さかすユルに きこま

よまをよ すずめ あつたをよ トマレメ

次に曲構成の音階的特徴である。『幼稚園唱歌集』は曲の多くが西洋音楽のドレミファソラシの7音音階で構成されているが、当時の学校教育はヨナ抜き音階である。ヨナ抜き音階は、明治時代の唱歌教育の設立期から用いられるようになったが、ドレミ…の代わりに「ヒフミヨイムナ」と指導しており、第4音のヨ（ファ）と第7音のナ（シ）のない5音で、「ヒフミイム」の「ドレミソラ」の5音音階である^(註23)。しかし、『幼稚園唱歌集』の多くが7音音階の曲であり【表2—曲構成参照】、当時の音楽教育とは異なる。

その理由として考えられることは、前掲表で示したように【表2】、『幼稚園唱歌集』はほとんどの曲が外国曲を採用し、それに日本語の言葉をはめているからである。つまり、旋律は創作ではなく外国曲から選定しているので西洋音楽の7音音階になるという解釈ができる。

後に触れる『幼稚園唱歌』は、瀧廉太郎等によってヨナ抜き音階で作曲されており、当時の音楽教育の背景がよく表れている。

3. 『幼稚園唱歌』

『幼稚園唱歌』^(註24)の刊行は、「保育唱歌」や『幼稚園唱歌集』とは全く異なった歌詞も曲も新しく創作したもので、ピアノ（オルガン）伴奏付きの画期的なものであった。それまでの歌詞は文語体で子供たちに理解しにくいものが多かったが、『幼稚園唱歌』は、子どもたちが目に触れる生活に馴染んだ話し言葉や親しみやすい曲の創作を目指して、明治34（1901）年、共益商社書店から発行されている。実際は瀧廉太郎が編集の中心となり、東くめ^(註25)、鈴木毅一^(註26)、佐佐木信綱^(註27)の作品を収めて全20曲を完成させている。

ここで、瀧廉太郎の略歴について述べておく。

- 明治12（1879）年、8月24日、父・吉弘、母・正子の間に長男として東京市芝区（現・東京都港区）に生まれる。内務省勤務の父親の仕事の関係で、神奈川県横浜、富山県、東京市（現・東京都）麹町、大分県大分市、竹田市と居住を転々とし小学校は転入学が多かった。竹田市の瀧家にはヴァイオリン、手風琴、ハーモニカがあり、瀧は巧みに奏して遊んだという。ピアノは後藤由男先生に学んだ。この時期に、音楽的才能が育まれたと思われる。
- 明治27（1894）年、9月、東京音楽学校（現・東京藝術大学）に入学。
- 明治30（1897）年、2月「砧」作詞、3月「日本男児」作曲。8月、竹田市に帰省し脚気を保養する。「散歩」作曲。12月「枯野の夕景」（作詞）、「命をすてて」作曲。
- 明治31（1898）年、研究科入学。
- 明治32（1899）年、東京音楽学校嘱託として授業を担当しながらピアノ、作曲学の研鑽を積んだ。11月23日「我州」、26日「四季の滝」、「尽くせや」他9曲の習作を手掛ける。
- 明治33（1900）年、6月、文部省よりドイツ留学3年間の命を受けるが、留学延長願いを提出し翌年4月、出発した。延長願いの理由はわかっていない。10月1日、ピアノ曲「メヌエット」、月日不明「古城」（作詞）、「友の墓」作曲。11月1日、名曲「花」が収められた組曲「四季」（花、納涼、月、雪）が出版される。10月7日、日本聖公会麹町聖愛教会で受洗、10月28日には堅信を受け正式に教会員として迎えられが、瀧がクリスチャンであることはあまり知られていないようだ。
- 明治34（1901）年、3月31日「荒城の月」「豊太閤」「箱根八里」が収められた『中学唱歌』（東京音楽学校蔵版）が共益商社書店より刊行される。瀧は、ドイツ出発直前の4月まで、ほぼ一人で『幼稚園唱歌』を完成させ、共益商社書店に原稿を手渡し、4月6日、横浜港からドイツ向け出発した。4月8日、洋上より鈴木毅一宛、出版予定の『幼稚園唱歌』の命名や、礼金、印税の事をこと細かく報告し、その金額は後日、送金する旨の書簡を送っている^(註28)。その書簡からも『幼稚園唱歌』は、瀧廉太郎が全面的に編纂したことがわかる。5月18日、ドイツのベルリンに到着。6月7日、ライプチヒに落ち着く。7月25日、瀧廉太郎、東くめ、鈴木毅一、佐佐木信綱の作品を収めた『幼稚園唱歌』が共益商社書店から発行される。10月1日、ライプチヒ王立音楽院の入学試験に合格し、ピアノ、作曲学を学ぶ。11月25日、感冒に罹り大学病院に入院。
- 明治35（1902）年、7月10日、瀧の病状は回復せず、ついに帰国命令が出る。8月4日、日本へ向け出帆。10月7日東京着、叔父の瀧大吉宅（東京麹町）に落ち着く。10月30日「別れの曲」、10月31日「水のゆくえ」、11月18日「荒磯」を作曲。11月23日、親のように慕っていた叔父の大吉が脳溢血で死去し大変なショックを受ける。11月24日、実家の大分へ出発し11月末日に到着する。
- 明治36（1903）年、2月14日、ピアノ曲「憾」（遺作）を書き遺し、6月29日に23歳10か月で死去する。

瀧廉太郎が中心となって編纂された『幼稚園唱歌』の発行経緯について、緒言^(註29)を見てみよう。

緒言 (原文のまま)

近時音楽唱歌の普及上進、日を追ふて著るしく、之に關する著書編纂、亦日に盛なり、然かもこれらの書は、多く小學校生徒を目的とせるものにして、其家庭又は幼稚園等に於ける學齡未滿の兒女のために編まれたるものに至りては、殆んど無きが如し、こゝに本社其缺を補はん事を思ひ、即ち作歌を、女子高等師範學校の附屬幼稚園に於て批評掛りを擔當せらるゝ東基吉氏、及び漣仙人巖谷氏に、作曲を瀧廉太郎氏、鈴木毅一氏及び東クメ氏に乞ひ、歌曲の品題、歌詞の程度、曲・の趣味、音域等、凡て以上の諸先生が多年の經驗を基として製作せられたるものを集め、こゝに新に此の書を編したり、購客之に由りて以て幼童の心情を啓發せられなば、庶幾くは斯道教育の一助たらん。

明治三十四年七月

編者識

緒言には、「当時、音楽教育が徐々に盛んになってきているが、小学生対象の教材はあるが、幼稚園児を対象にした教材集はほとんどない。本書は東京女子高等師範学校の教授で附属幼稚園の批評掛を担当していた東基吉（東くめの夫）や児童文学・詩人の漣仙人巖谷氏から子どもにふさわしい幼児曲集編集の企画・相談を受け、瀧廉太郎を中心に、鈴木毅一、東くめ等に作品を依頼して編集されたものである」と記載されている。

幼児向けの唱歌集がほとんどない時代に編集、発行された画期的なものであったことが伺える。また、本書の原本の扉には、「共益商社編」とあるが、緒言からわかるように、実際は瀧廉太郎等によって編集されていることが実証されている。瀧廉太郎がドイツ留学直前の4月まで編集し、原稿を渡独直前に共益商社書店に手渡しており^(註30)、瀧の編集作業によってまとめられた事がわかる。

以下のように、凡例^(註31)には瀧廉太郎の指導法に関する工夫が詳細に記述されている。

凡例 (原文のまま)

- 一. 本書載する所の歌曲の品題は、兒童が日常見聞する風物童話等に取り、主として四季の順序に排列したれば教師は其期・の折々に應じて適當なるものを撰み、先づ談話問答等によりて、兒童の興味を喚起せしめ、然る後一句づゝ口授するを宜しとす。
- 一. 歌曲の速度は、決して緩漫に流るべからず、寧ろ急速なるべし、なほ本編収むる所の歌曲は、凡て遊戯に添ひ得べきものなれば、或は適當の動作等を加へて、以て、一層の興味を添ふるをよしとす。
- 一. 唱歌の方法は活潑なるべし、然かもよく兒童の發音に注意し、決して粗暴なる叫聲を發せしむべからず、又兒童の歡心を買はんとして、徒らに多數の曲を教ふるはよろしからず、甲の歌曲充分熟練して後、はじめて乙の歌曲に移るべし。
- 一. 本書の歌曲は、其興味を助けん爲め、凡て伴奏を附したり、然れども、こは先づ口授法を以て、兒童の大抵熟達したる後、樂器を添へて歌はしむる際に用ゐんが爲めにして、初めより教授に伴はしめんが爲めにはあらず。

一．本書歌詞の假名遣ひは、凡て文部省新定の方法に由りたり。

凡例を読み解くと、次のような指導的配慮が記載されている。

- (1) 曲目は、児童が生活で見聞する風物童話等から選び、四季の順で並べ教師が季節に応じて選曲する。会話応答で、児童に興味関心を持たせるように口授法で指導する。
- (2) 曲の速さは、遅くなくむしろ早くする。曲は全部遊戯を伴い、あるいは適当な動作を入れると児童の興味が湧く。
- (3) 歌い方は、児童の発音に注意し、活発であるが粗暴な叫び声（怒鳴り声）ではいけない。曲をいきなりたくさん教えてはいけない。
- (4) 楽譜はすべて伴奏をつけているが、まずは口授法で始め、子どもたちが歌えるようになってから楽器伴奏を入れる。

瀧廉太郎は、凡例できわめて具体的な指導方法に触れており、子どもたちの興味関心を高めながら歌唱指導するように要点を明記している。瀧廉太郎の教育的配慮と音楽的要素を十分に生かしたものである。

次に、『幼稚園唱歌』の20曲を表記化してみる。

【表3】『幼稚園唱歌』

ルビは原本通り。原本に作詞・作曲名は記入されていないが資料^(註32)を参考に記載した。

○付番号は鈴木毅一の商品。曲構成の解釈は筆者。

作成：筆者

	曲名	作歌	作曲	曲構成
1	ほーほけきよ	瀧廉太郎	瀧廉太郎	へ長調・2/4拍子・32小節・ヨナ抜き音階 (15小節目B ^b 経過音的)
2	ひばりはうたひ	東くめ	瀧廉太郎	ト長調・C拍子・24小節・ヨナ抜き音階
③	ねこ 猫の子	鈴木毅一	鈴木毅一	ト長調・2/4拍子・10小節・ヨナ抜き音階 (7小節目C音経過音的)
4	こいのぼり 鯉幟	東くめ	瀧廉太郎	ト長調・2/4拍子・16小節・ヨナ抜き音階
5	うみ 海のうへ	東くめ	瀧廉太郎	へ長調・2/4拍子・20小節・ヨナ抜き音階
6	ももたろう 桃太郎	瀧廉太郎	瀧廉太郎	ト長調・2/4拍子・16小節・ヨナ抜き音階
⑦	しろ 白よこひ	鈴木毅一	鈴木毅一	ト長調・2/4拍子・16小節・ヨナ抜き音階
8	いけかへる お池の蛙	東くめ	※ 瀧廉太郎	ト長調・2/4拍子・8小節・ヨナ抜き音階
9	ゆふだち 夕立	東くめ	瀧廉太郎	ト長調・2/4拍子・16小節・ヨナ抜き音階
10	かち かち山	東くめ	瀧廉太郎	ニ長調・2/4拍子・16小節・ヨナ抜き音階
11	みづあそ 水遊び	瀧廉太郎	瀧廉太郎	ト長調・2/4拍子・12小節・ヨナ抜き音階
12	ほと 鳩ぽっぽ	東くめ	瀧廉太郎	へ長調・C拍子・12小節・ヨナ抜き音階
13	きく 菊	東くめ	瀧廉太郎	ト長調・C拍子・16小節・ヨナ抜き音階 (11小節目C音経過音的)

	曲名	作歌	作曲	曲構成
14	雁 <small>がん</small>	瀧廉太郎	瀧廉太郎	へ長調・C拍子・16小節・ヨナ抜き音階
15	軍ごっこ <small>いくさ</small>	東くめ	瀧廉太郎	ト長調・C拍子・16小節・ヨナ抜き音階
16	雀 <small>すずめ</small>	佐佐木信綱	瀧廉太郎	へ長調・2/4拍子・16小節・ヨナ抜き音階
⑰	風車 <small>かぐるま</small>	鈴木毅一	鈴木毅一	へ長調・2/4拍子・12小節・ヨナ抜き音階 (2小節目B ^b 音経過音的)
18	雪やこんこん <small>ゆき</small>	東くめ	瀧廉太郎	ハ長調・2/4拍子・16小節・ヨナ抜き音階 (3小節目F音経過音的)
19	お正月 <small>しょうがつ</small>	東くめ	瀧廉太郎	へ長調・C拍子・12小節・ヨナ抜き音階
20	さよなら	東くめ	瀧廉太郎	ト長調・C拍子・20小節・ヨナ抜き音階

作品について

- 1) 全20曲のうち、瀧廉太郎の作曲は17曲。作詞：東くめ 作曲：瀧廉太郎は12曲で最も多い。瀧廉太郎の作詞：作曲は4曲。作詞:佐佐木信綱 作曲:瀧廉太郎は1曲。鈴木毅一作詞:作曲は3曲。③、⑦、⑰
- ※8の「お池の蛙」は、原曲がドイツ曲で瀧の編曲と解釈され、瀧の作曲数は計16曲という研究書もあるが^(註33)、現在は瀧廉太郎の作曲作品と位置づけられ17曲になっている。^(註34)
- 2) 『幼稚園唱歌』の原本には作歌：作曲名は記入されておらず長年不明だったが、東くめのメモをもとに作者名が明確になり、現在では全曲判明している。
- 3) ● 4「鯉幟」は、「屋根より高いこのぼり」の歌いだし、「このぼり」（作詞:近藤宮子、作曲:不詳）とは異曲。
 - 6「桃太郎」は、「桃太郎さん桃太郎さん」の歌いだし、「桃太郎」（作詞：不詳、作曲：岡野貞一）とは異曲。
 - 12「鳩ぽっぽ」は、「ぽっぽぽっぽ鳩ぽっぽ」の歌いだし、鳩（作詞：作曲不詳）とは異曲。
 - 18「雪やこんこん」は、「雪やこんこあられやこんこ」の歌いだし、雪（作詞：作曲不詳）とは異曲。

『幼稚園唱歌』の特徴

- (1) 凡例の通り、春の季節を表現した「ほーほけきょ」に始まり、夏の風情を表わした「水あそび」、1月には賑々しい「お正月」、3月には「さよなら」が配列されており、季節の順に掲載されている。
- (2) 20曲に左手のピアノ（オルガン）伴奏が作曲されている。日本初の幼児曲伴奏付き教材集である。
- (3) 伴奏和音は、I、IV、V、V₇の主要和音に加え、II、VI、V/V₇（ドッペルドミナント）で構成されている。
- (4) 伴奏型は和音の基本形、和音分散型などである。教師が指導しやすい、子どもになじみやすい伴奏型を創作している。【楽譜5】
- (5) 調はハ長調、へ長調、ト長調、ニ長調で子どもが読譜しやすく歌いやすい声域で創作されている。

- (6) リズムは8分音符、スキップのリズムを多用しながら4分音符、2分音符を配列して作曲されている。
- (7) 拍子は、2/4拍子13曲、C拍子7曲で、3/4拍子や6/8拍子等は作曲されていない。
- (8) 子どもの会話風応答形式の曲があり、緒言で述べている通りの作品を創作している。【表3-1】「ほーほけきょ」)
- (9) 讚美歌の特徴を取り入れた曲を作曲しているように思われる。瀧廉太郎は讚美歌と自作曲との関係に触れていないが、瀧廉太郎自身がクリスチャンである背景を考えると、「讚美歌」の手法を生かすことはごく自然なことと考える。【表3-20】「さよなら」)

【楽譜5】『幼稚園唱歌』の伴奏型

○なし数字は【表3】の曲名を示す(例：19「お正月」)。

作成：筆者

①18 ②1 ③5 ④13,16 ⑤17 ⑥12 ⑦14

⑧19 ⑨3,6,7 ⑩4 ⑪8,9 ⑫13 ⑬11 ⑭2

⑮15 ⑯20 ⑰10

ここで、作品の特徴について、「桃太郎」と「さよなら」の楽譜を通して解釈をしてみたい。

【楽譜6】の「桃太郎」は、お伽話のストーリーを歌詞にしている。(作詞：瀧廉太郎)

- (1) 調性はト長調で旋律はD音から二点E音までの音域があり、8分音符を主にスキップのリズムが配列されて軽快な曲である。
- (2) 音階は、C音(ファ)とF[#](シ)のない5音音階で、明治期の唱歌教育の設立期に学校教育で行われたヨナ抜き音階である。瀧廉太郎の作品は、その当時の音楽教育が反映されている。
- (3) 拍子は2/4拍子で、20曲中、最も多く作曲されている作風である。
- (4) 伴奏は、【楽譜5】の⑨伴奏型に当たり、『幼稚園唱歌』で最も多く創作されて、現在の幼児曲にも頻繁に多用されている代表的な伴奏型といえるだろう。
- (5) 伴奏の和音進行は、「桃太郎」ではI、IV、V、V₇、II、VIが用いられており【楽譜6】の破線まる／筆者挿入)、終止形は(14~16小節の伴奏)、I→II→I²→V₇→Iの典型的な終止進行形である。

【楽譜6】『幼稚園唱歌』 原本より「桃太郎」^(註35)

岐阜大学図書館 蔵

桃 太 郎

I V

V₇ VI

IV

I II I² V₇ I

日 本 一 の 黍 団 子、
お 供 の 褒 美 は、
犬 猿 雉 子 の、
桃 太 郎 さ ん の、
お 供 に は、
三 匹 よ。

○ 桃 太 郎

【楽譜7】の「さよなら」は、瀧廉太郎が日常触れていたであろう「讃美歌」の手法に一致している点がある。

- (1) 伴奏譜右手1、3、9、11、15小節の3、4拍目（破線まる／前掲）は保持音を使っている。このような保持音は讃美歌でも多くみられ、その手法を生かしているのではないか。
- (2) 伴奏譜左手3、11小節目（破線まる／前掲）のテノール、バスの旋律ラインも讃美歌でよくある手法である。
- (3) ソプラノ、アルト、テノール、バスの4声体で作曲され、和声学の基礎を踏まえた讃美歌の作曲手法である。
- (4) 「さよなら」は20小節の曲であるが、21小節目に讃美歌の終止形（IV→I）を加えてもごく自然な讃美歌の終止の響きになるのではないだろうか。【右下楽譜】（筆者作成）
- (5) 『幼稚園唱歌』20曲中19曲は、【楽譜5】に示されるように軽快でマーチ風な伴奏の創作が多い中、「さよなら」のみ穏やかでゆったりとした作風で他19曲（内3曲は鈴木毅一作曲）とは異なった作風である。

21 小節目

IV I

これらのことから、明治33（1900）年に受洗した瀧廉太郎が、『幼

『幼稚園唱歌』に讚美歌の特徴を表現しようという創作意欲があったことは十分に考えられる。

【楽譜7】『幼稚園唱歌』原本より「さよなら」^(註36)

岐阜大学図書館 蔵

さよなら

今日^{けふ}の^{けい}い^いこ^も、 す^すみ^まし^た。
 み^みな^なつ^つれ^れだ^だつ^つて、 歸^{かえ}り^まし^よ。
 あ^あした^{した}も^もま^また^たく、 こ^こゝ^に來^きて。
 け^けい^いこ^こや^やあ^あそ^そび^びを、 い^いた^たし^まし^よ。
 先^{せん}生^{せい}御^ご機^き嫌^{きら}よ^し、 さ^さよ^よー^{なら}。

II. まとめ

これまで、「保育並遊戯唱歌（保育唱歌）」、『幼稚園唱歌集』、『幼稚園唱歌』のそれぞれの特徴と変遷を辿ってきた。さらに、音楽教育に果たした役割にも言及した。

「保育並遊戯唱歌（保育唱歌）」は、東京女子高等師範学校附属幼稚園（現・お茶の水女子大学附属幼稚園）の幼児音楽教育の充実を図るため、宮内省式部寮雅楽課に撰譜（作曲）を依頼、明治10（1877）年から明治15（1882）年にかけて約100曲を収めた日本で初めての幼児唱歌集である。それは幼稚園向けの教材のみならず、東京女子高等師範学校生の指導にも活用された教材だった。

楽器はピアノやオルガンなどがない時代で和琴や笏拍子が指導楽器として用いられた。曲の特徴は、現代の子どもたちの曲調のようにスキップや軽快な音楽を特徴としたものではなく、ほとんどがテンポも遅くゆったりとした宮廷音楽調で、園児の遊戯や身体表現を伴った唱歌もあった。五線譜が普及されていない時代であったから雅楽の「墨譜」で表されているが、「墨譜」は馴染みが薄く保育現場には浸透しなかったため、「保育唱歌」も広がりを見せなかった。

100曲中、幼児曲として誕生した「君ガ代」は唯一歌い継がれているが、今日では「国歌」として位置づけられている。

「保育唱歌」は「君ガ代」以外うたわれていないものの、幼児唱歌教材の嚆矢として、今日の道筋を築いた貴重な事績といえるだろう。

また、『幼稚園唱歌集』は、明治20(1887)年、日本で初めて官制版として文部省音楽取調掛(現・東京藝術大学)から刊行されたもので、五線譜の単旋律で29曲が収録されている。

曲構成の特徴は、外国曲や既成曲に文語体の歌詞をはめたものが多く、子どもたちには馴染みにくいものが多かった。29曲の中には、「ちょうちょ」(ドイツ民謡)、「きらきら星」(フランス古歌)、「ぶんぶんぶん」(ボヘミア民謡)など現代に親しまれ歌い継がれている曲もあり、原詩を現代風に変容させながら、今日の音楽教育に受け継がれていった『幼稚園唱歌集』の果たした役割は大きいだろう。しかし、子どもの感性に根ざした音楽には充分でなかったと言わざるを得なかった。

それを解消しようとしたのが『幼稚園唱歌』の登場である。

子どもが主役の音楽、つまり子どもの生活に密着した子どもが楽しめる幼児唱歌集の作成を目指したものが明治34(1901)年に発行された『幼稚園唱歌』である。

『幼稚園唱歌』の編集方針は、子どもの生活に呼応した言葉と子どもに親しみやすい曲づくりであった。それ以前の「保育唱歌」、『幼稚園唱歌集』は、雅楽課による撰譜や文部省の官公庁により編集し発行されたものだが、『幼稚園唱歌』は、瀧廉太郎を中心に、東くめ、鈴木毅一、佐佐木信綱等、自作品を収録した唱歌集だった。

画期的なことは、それ以前の幼児唱歌集は、単旋律のみであったが瀧廉太郎等によって初めてピアノ(オルガン)伴奏が付けられた。その伴奏型は、現在も多用されている基本的で特徴的なものばかりである。【楽譜5参照】

また、春夏秋冬の季節順に曲が配列されており、このことは現在発行されている曲集にも多くみられる。例えば、『園児とおかあさんの歌1及び2』^(註37)は、春夏秋冬で教材が明確に配列されており、4月のうた28曲、5月のうた20曲、6月のうた11曲、7・8月のうた11曲というように3月まで配列されている。1月の歌には瀧廉太郎の「お正月」(作詞:東くめ)も入っている。また、『幼児の四季とみんなの歌』^(註38)には、春から夏、秋、冬に因んだ歌が収録されており、冬の季節歌には瀧廉太郎の「お正月」(作詞:前掲)も登場してくる。

筆者は大学音楽教育のテキストとして、『新・幼児の音楽教育—幼児教育・保育士養成のための音楽的表現の指導』^(註39)を用いているが、「お正月」、「水あそび」(作曲:瀧廉太郎 作詞:東くめ)が掲載されており、保育士養成校の学生たちが、次世代の子どもたちへ継承していく幼児曲として重要な教材である。保育現場では、園児に歌を指導する時、季節の歌を毎月の歌として子どもたちに指導しているのは常である。

瀧廉太郎の作品は116年を経て、今なお親しまれ愛唱されているが、瀧メロディーの生命力を感じさせるものである。瀧廉太郎の『幼稚園唱歌』へのさまざまな試みは、時代を経て現在に定着していることが本研究を通して知ることができたが、瀧廉太郎は日本の幼児音楽の先駆者としても位置づけられるだろう。

日本初の幼児唱歌集「保育並遊戯唱歌(保育唱歌)」が発行されてから140年、『幼稚園唱歌集』、『幼稚園唱歌』はその時代背景を受けて、幼児音楽教育の役割を果たしながら連綿と受け

継がれている。

明治の洋楽草創期から先達者が探究した子ども主体の音楽教育のあり方が、今日の音楽教育にどのように影響を与えて来たか、今後のテーマとして研究を続けていきたい。

【註】

1. 「唱歌教材目録（明治編）」国立音楽大学音楽研究所年報第4集、1980、及び、「唱歌索引（明治編）1.曲名・歌詞索引」国立音楽大学音楽研究所年報第5集別冊、1984
2. 「保育並遊戯唱歌（保育唱歌）」東京女子高等師範学校附属幼稚園依頼、宮内省式部寮雅楽課撰譜、明治10（1877）年～明治15（1882）年作成
3. 文部省音楽取調掛編纂『幼稚園唱歌集』東京音楽学校蔵版、明治20（1887）
4. 共益商社編『幼稚園唱歌』共益商社楽器店蔵版、明治34（1901）
5. 江崎公子編『音楽基礎研究文献集第15巻 保育並遊戯唱歌の撰譜』大空社、1991、p.13
6. 伊吹山真帆子著「保育唱歌について」東洋音楽研究第44号、昭和54（1979）、p.20
7. ①江崎公子編『音楽基礎研究文献集15巻 保育並遊戯唱歌の撰譜』より整理・表記作成し、②齋藤基彦編『復刻 明治の唱歌Ⅲ』文憲堂、2015 ③「原典による近代唱歌集成－誕生・変遷・伝播－原典印影Ⅰ」ビクターエンタテインメント株式会社、2000 ④伊吹山真帆子著「保育唱歌について」東洋音楽研究第44号、昭和54（1979）、pp.1～26の①～④の4冊を参考にした。
※「遊魚（うろくづ）」は、上記①の『音楽基礎研究文献集』では「遊戯唱歌（p.51）」及び「唱歌（p.375）」の2通りで記載され、『復刻 明治の唱歌Ⅲ』では「唱歌（p.40）」に分類されているが、本論文では『音楽基礎研究文献集』を踏襲し「遊戯唱歌」とした。
※歌詞作者や撰譜者は上記資料①、②、③、④で異なったものもあるが、多くは『音楽基礎研究文献集』を踏襲した。例：「鹿島神」の撰譜者は①（p.329）と③（p.155）では「東儀彭質」とされ、②（p.41）では「芝葛鎮」とされている。また、「梓弓」の作詞者は①（p.45）と②（p.35）では「平春庭（明倫集）」とされ、③（p.178）は「不詳」となっている。
8. 5に同じ。p.19、p.181
9. CD「原典による近代唱歌集成－誕生・変遷・伝播－〔6〕 伶人たちの唱歌～保育唱歌」ビクターエンタテインメント株式会社、2000
10. 9に同じ。CD6－16「教ノ道」訳：豊田英雄 撰譜（作曲）：豊時鄰
11. 齋藤基彦編『復刻 明治の唱歌Ⅲ』文憲堂、2015、p.68
12. 『原典による近代唱歌集成－誕生・変遷・伝播－原典印影Ⅰ』ビクターエンタテインメント株式会社、2000、p.174（芝祐夏筆保育唱歌譜）芝祐靖氏所蔵
13. 5に同じ。巻末〔8〕芝祐泰編「保育並遊戯唱歌、現代的五線譜」昭和33（1958）年
14. 文部省音楽取調掛編「小学唱歌集」東京音楽学校蔵版、第1集＝明治15（1882）、第2集＝明治16（1883）、第3集＝明治17（1884）
15. 3に同じ。緒言pp.1～2
16. 11に同じ。目次〔vii～viii〕
17. 阿部直美監修/乳幼児教育研究所『保育のピアノ伴奏－子どもの大好きなうた150曲－』日本文芸社、平成28（2016）年、p.84

18. 「小学4年生の音楽指導書」教育芸術社、昭和49（1974）年版、pp.8～11
19. 「小学1～6年音楽教科書及び中学音楽教科書」教育芸術社、平成29（2017）、及び「高校音楽教科書MOUSA I」教育芸術社、平成29（2017）、『同・MOUSA II』平成28（2016）
20. 足羽章編『子どもの歌名曲選』ドレミ楽譜出版社、2015、pp.120～121
21. ドレミ楽譜編『たのしいこどものうた600選』自由現代社、1995、pp.150～151
22. 3に同じ。p.2
23. 『新訂 標準音楽辞典』音楽之友社、2003、p.2044（大意）
24. 4に同じ。
25. 東くめは、明治10（1877）年6月30日、和歌山県新宮に生まれる。瀧廉太郎より2年先輩の東京音楽学校（現・東京藝術大学）同窓生。作詞家。東京府立高校教諭を務めた後、東京女子高等師範学校（現・お茶の水女子大学）の教授で附属幼稚園批評掛の東基吉と結婚。基吉とともに「子どもにふさわしい歌」を企画し、瀧廉太郎、鈴木毅一とともに『幼稚園唱歌』発行に参画した。瀧廉太郎とのコンビ作品は多い。名曲「四季」の「納涼」も瀧とのコンビ作品。昭和44（1969）年、91歳の天寿を全うした。
26. 鈴木毅一は、明治10（1877）年6月22日、静岡県掛川に生まれる。瀧廉太郎の無二の親友で東京音楽学校の学友。明治29（1896）、東京音楽学校（現・東京藝術大学）に入学。明治32（1899）年師範科卒業後、宮崎師範学校を皮切りに、小・中・高・師範学校の教師を務め、大正14（1925）年、新潟県立新発田高等女学校へ赴任。大正15（1926）年、風邪を拗らせて50歳で死去する。鈴木が多く瀧廉太郎資料を収集しており、鈴木の遺族によって保管されていたことが今日の瀧廉太郎の研究解明に大きく寄与した。
27. 佐佐木信綱は、明治5（1872）年6月3日、三重県鈴鹿市生まれの国文学者、歌人。明治21（1888）年、東大文学部古典科卒。和歌の歴史的研究に従事し、万葉学の基礎的研究に務めた。竹柏会を創立、明治31（1898）年、機関誌「心の花」を刊行した。著書に『思い草』『うぐいす』等がある。昭和38（1963年）で92歳で永眠。
28. 小長久子著『楽聖 滝廉太郎の新資料』大分滝廉太郎研究会、昭和38（1963）、p.6
29. 4に同じ。緒言pp.1～2
30. 28に同じ。pp.6～7、pp.122～123
31. 4に同じ。凡例pp.1～2
32. ①小長久子編『瀧廉太郎全曲集—作品と解説』音楽之友社、平成26（2014）
②齋藤基彦編『復刻 明治の唱歌Ⅱ』文憲堂、2015、目次 [vii～viii]
33. ①遠藤宏著『瀧廉太郎の生涯と作品』音楽之友社、昭和25（1950）、p.39
②28に同じ。p.124
③海老澤敏著『瀧廉太郎—夭折の響き—』岩波新書、2004、p.176
34. ①32の①に同じ。p.61
②CD及びライナーノーツ（p.19）「没後90年記念 瀧廉太郎全曲集」日本コロムビア株式会社、1993
35. 4に同じ。pp.12～13
36. 4に同じ。pp.40～41
37. 西日本幼児教育研究協議会編『園児とおかあさんの歌1』及び『園児とおかあさんの歌2』全音楽譜出版社、昭和45（1970）年初版、本書は昭和51（1976）年増刷版か？（発行年

未記載のため調査し推測)

38. 在原章子・三好優美子・柳田憲一・山内悠子共編『幼児の四季とみんなの歌』全音楽譜出版社、平成26（2014）
39. 井口太代表編著『新・幼児の音楽教育－幼児教育・保育士養成のための音楽的表現の指導－』朝日出版社、2014、p.142「お正月」、p.182「水あそび」

【参考資料】 図書・論文等

1. 三村真弓著「明治期幼稚園唱歌教育における唱歌教材に関する研究－教材の形態的側面の検討を中心に－」安田女子大学教科教育研究第11号、1996、pp.27～36
2. 江崎公子編『音楽基礎研究文献集第15巻 保育並遊戯唱歌の撰譜』大空社、1991
3. 江崎公子編『音楽基礎研究文献集別巻』大空社、1991
4. 齋藤基彦編『復刻 明治の唱歌Ⅱ』文憲堂、2015
5. 齋藤基彦編『復刻 明治の唱歌Ⅲ』文憲堂、2015
6. 大和田建樹・奥好義編『明治唱歌 幼稚の曲第一集』中央堂、明治21（1888）
7. 大和田建樹・奥好義編『明治唱歌 幼稚の曲第二集』中央堂、明治22（1889）
8. 『原典による近代唱歌集成－誕生・変遷・伝播－原典印影Ⅰ』ビクターエンタテイメント株式会社、2000
9. 『原典による近代唱歌集成－誕生・変遷・伝播－原典印影Ⅱ』ビクターエンタテイメント株式会社、2000
10. 『原典による近代唱歌集成－誕生・変遷・伝播－原典印影Ⅳ』ビクターエンタテイメント株式会社、2000
11. 東ゆかり著「保育唱歌におけるフレーベル主義－豊田英雄の文書を中心に－」鎌倉女子大学学術研究所報第15号、平成27（2015）、pp.73～79
12. 文部省音楽取調掛編纂『幼稚園唱歌集』東京音楽学校蔵版、明治20（1887）
13. 小長久子著『楽聖 滝廉太郎の新資料』大分滝廉太郎研究会、昭和38（1963）
14. 小長久子著「滝廉太郎未発表遺作について」大分大学教育学部研究紀要、昭和40（1965）
15. 中園久子著「瀧廉太郎とその作品」大分大学教育研究所、昭和27（1952）
16. 共益商社編『幼稚園唱歌』共益商社楽器店蔵版、明治34（1901）
17. 遠藤宏著『瀧廉太郎の生涯と作品』音楽之友社、昭和25（1950）
18. 郷原宏著『わが愛の譜－滝廉太郎物語－』新潮文庫、平成5（1993）
19. 小長久子著『滝廉太郎』吉川弘文館、平成2（1990）
20. 小長久子編『瀧廉太郎全曲集－作品と解説－』音楽之友社、平成26（2014）
21. 山田野理夫著『荒城の月－土井晩翠と滝廉太郎－』恒文社、平成5（1993）
22. 海老澤敏著『瀧廉太郎－夭折の響き－』岩波新書、平成16（2004）
23. 内海由美子著「滝廉太郎の音楽作品におけるキリスト教信仰の影響」プール学院大学研究紀要第54号、平成25（2013）、pp.121～135
24. 蒲生美津子／土田英三郎／川上央編『兼常清佐著作集6【音楽教育】音楽の話と唱歌集 音楽概論』大空社、2009
25. 24の編者と同じ『兼常清佐著作集7【音楽教育】音楽に志す人へ 日本音楽教育史 音楽の教室』大空社、2009

26. 金田一春彦・安西愛子編『日本の唱歌（上）明治篇』講談社、平成元（1989）
27. 足羽章編著『ピアノ伴奏 子どもの歌名曲選』ドレミ出版社、2015
28. 阿部直美監修／乳幼児教育研究所『保育のピアノ伴奏 子どもの大好きなうた150曲』日本文芸社、2016
29. 『小学1年～6年音楽教科書』教育芸術社、平成29（2017）
30. 『中学1年～2・3年及び「器楽」音楽教科書』教育芸術社、平成29（2017）
31. 『高等学校音楽「MOUSA」Ⅰ』教育芸術社、平成29（2017）
32. 『高等学校音楽「MOUSA」Ⅱ』教育芸術社、平成28（2016）
33. 日本基督教団讃美歌委員会編『讃美歌』日本基督教団出版局、1992
34. 日本基督教団讃美歌委員会編『讃美歌』日本基督教団出版局、1983
35. 日本基督教団讃美歌委員会編『讃美歌21』日本基督教団出版局、1997
36. 日本基督教団讃美歌委員会編『讃美歌・讃美歌第二編 ともにうたおう』日本基督教団出版局、1989

DVD・CD・新聞書評等

1. 大山伸子書評「洋楽草創期の息吹－滝廉太郎の天才ぶり知る」沖縄タイムス社、平成5（1993）年9月14日掲載、郷原宏著『わが愛の譜－滝廉太郎物語』新潮文庫、平成5（1993）年7月25日出版の書評
2. DVD『わが愛の譜－滝廉太郎物語』東映・日本テレビ製作、澤井信一郎監督、平成5（1993）
3. CD『没後90年記念 滝廉太郎全曲集』コロムビア株式会社、平成5（1993）
4. CD「原典による近代唱歌集成－誕生・変遷・伝播」〔6〕伶人たちの唱歌～保育唱歌』ビクターエンタテインメント株式会社、2000

【謝辞】

岐阜大学図書館、大分大学図書館、大阪市立大学附属図書館、大阪大学附属図書館、東京藝術大学附属図書館、京都産業大学図書館、沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館、沖縄キリスト教学院図書館の各図書館には貴重な資料の閲覧をご快諾下さって、誠に有難うございました。心から感謝申し上げます。

